

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『7つの習慣』

ステイブ・R・コヴィー著

(キングベアー出版)
本藤小百合



本書に出会ったのは2015年、親子関係がギクシャクし娘は不登校になり、私自身は何をしたらいのかわからず苦しい日々を送っていた頃だった。ある日、何気なく本屋でこの分厚い書籍を手にした。冒頭に書かれていたのはビジネス本らしからぬ著者コヴィー博士と息子さんの体験談だった。何をやってもうまくいかない息子をどうにかしたいと思って叱咤激励する日々。でもそれは息子への愛というより「子どもの成績で自分たちの社会的評価を得ようとしていた」ことに気づく。そこで、まずは自分の内面に目を向けることで息子に対する「見方」を変えることにする(インサイド・アウト)。それによって親子の関係性は変わり息子も大きく成長していったという体験だった。それを読んで「なるほど……」と深い感銘を受けたが、娘と私の現実はその簡単に変えることは出来なかった。

こんなこともあった。娘から職場の問題を相談され、私は「今こそ傾聴する時だ! (第5の習慣)」とばかりに一生涯命話を「聞いた」。しかし、こともあろうか私は上司の立場に立って娘にアドバイスをしてしまっていた……。ただ話を聴いてほしかった娘の期待を大きく裏切り、激怒させてしまった。「オーマイガッド! (涙)」。けれど私は諦めなかった。こういう時はどうするかもちやんと書いてあった。「信頼口座から信頼を引き出してしまったときには心から謝る」(信頼口座の預け入れ)なのである。

あれから8年が経ち、我々はとても仲の良い親子に進化し、娘も夢に向かって一歩ずつ歩んでいる。これ以上の喜びはない。

このように、「7つの習慣」を学び、実践することで、人生を変えていけることを実感した私は、本書の読書会を主催するファシリテーターとなった。なかでも最も印象に残るのは、4年連続で参加していただいている40代の女性だ。彼女もまた、家族や職場での人間関係、仕事などのさまざまな課題を抱えていた。そして、「7つの習慣」を真摯に受け入れ実践することで、関係性が大きく変わり課題が解決していった。これほど嬉しいことはない。

これからもこの素晴らしい原則集を多くの人と共有していきたい。これが私のライフミッションだ。



2023年9月23日(土) 特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 発行



<https://www.kodomonohon.org>

E-mail: info@kodomonohon.org



研究会設立40周年記念公開講座

子どもの本は世界につながる窓

講師 さくまゆみこさん (翻訳家)

日時 9月10日(日) 10時〜12時

会場 くまもと県民交流館パレオ10階会議室7

参加者 35人

○子どもの本は窓



子どもの本は、そこを開けると、今、こことは違う世界が見えてくる窓だと思っている。窓を設けるのは大人、開けるのは子ども。子どもは、今、ここに縛られて暮らしている。日本は同質性が大事にされるので、厳しさが増幅されてしまう。そんなときに窓を開けて違う世界を見ることよって生きられる子どももいると考えている。

例えばアフリカ系アメリカ人で人種差別的な社会の中で子ども時代を過ごしたジュリアス・レスター。詩人で作家でミュージシャン。本を通して、自分がいるところとは違う世界があることを知ったから生きていくことができたと言っている。子どもの本は生きる力にも関わってくる。『はみだしインディアン』のホントにホントの物語』(小学館)を書いたアメリカの先住民作家のシャーマン・アレクシーは、白人じゃない子どもが主

人公の絵本『ゆきのひ』(偕成社)に出合う。自分も社会の主人公になってもいいと思えば作家になる。人生の様々な不都合を乗り越えていく力の最初に存在したのがこの絵本だった。キャサリン・パターンソンはアメリカの作家。国際アンデルセン賞の受賞スピーチで、外国からの翻訳作品が必要だと言ひ、「どの国の子どもたちとも仲良くなつてもらわなくてはなりません。人は自分の友

だちが暮らしている国に害を与えようとは思わなくなるからです」と言つた。

○IBBYとJBBYのこと

IBBYは国際児童図書評議会で、第2次大戦後の1953年にできた国際組織。JBBYはその日本支部で1974年に発足した。私は今年6月まで会長を務めていた。

『子どもの本で平和をつくる』(小学館)には、IBBYをつくったイエラ・レップマンが登場する。彼女は戦後、ドイツの子どもたちのために20カ国に手紙を出し4000冊の子どもの本を集める。子どもたちが、本を見て心が明るく前向きになつていく様子を花で表わしている。

今、翻訳ものをやる出版社も出てきているが、世界の子どもの本はどんな役に立つのか。違う価値観や文化を持った人たちがいることを知り偏

見を持たなくなる。ほかの文化に関心を持ち、国際理解や国際平和に繋がっていく。私は、日本の作家が書かない、あるいは書けない分野の窓を開けるのも翻訳ものの役割と思つている。それから、自分とは違う立場にいる人の身になってみることでエンパシーが養われていく。そして、あえて言うが社会科学の勉強に役立つ。

JBBYでは「IBBYがすすめる世界の児童書」国際アンデルセン賞とIBBYオナーリスト」と「世界のバリアフリー児童図書」を出している。それから、優れた翻訳本を選んだ「おすすめ！世界の子どもの本」と、日本の情報を世界に伝える「おすすめ！日本の子どもの本」も。「あしたの本だな」は、少年院や鑑別所で図書にかかわっている方からおすすめる本を選んでほしいという要望があり選んだ。

○日本の子どもたちにも多様な窓を

10年ぐらい前から、世界の子どもの本のキーワードは多様性。日本の子どもたちに、多様なものが一緒に暮らすことよって豊かさが生まれることを伝えていきたい。子どもは、自分がまわりの人と少し違うことでコンプレックスを持ちやすい。もっと多様でいい、あなたはあなたでいいと言つていくことが必要ではないか。いろんな視



点を知ること、自分はどう思うのか考えられるようになると思う。以下、本を紹介する。



・いじめについて
『虫ガール〜ほんとうにあったおはなし』(岩崎書店) / 『ひとりひとりのやさしさ』(B.L出版) / 『ぼくの弱虫をなおすには』(徳間書店)

・ジェンダーの問題について

『ふたりママの家で』(サウザンブックス社) / 『たかくとびたて女の子』(汐文社) / 『ジョージと秘密のメリッサ』(偕成社)

・困難を抱えた子どもについて

『ぼくは川のように話す』(偕成社) / 『ねえ、きいてみて!〜みんな、それぞれちがうから』(汐文社) / 『アイちゃんのいる教室』(偕成社) / 『ありがとう、フォルカーせんせい』(岩崎書店)

／『たぶんみんなは知らないこと』(講談社) / 『ワンダー』(ほるぷ出版)



・英米と日本の出版界の違い

日本の出版界には、マジョリティーを示していればいいという傾向があるが、英米では多様性を子どもに示す。日本では、マイノリティーである困難を取り上げ、それをメインテーマにして作品を書いているが、英米ではいろんなマイノリティーが多様な登場人物の一人としてさりげなく登

場してくる。

『なかよしの犬はどこ?』(徳間書店) / 『彼の名はウォルター』(あすなる書房) / 『ペーパーボーイ』(岩波書店) / 『僕は上手にしゃべれない』(ポプラ社)

『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』(汐文社) は、アメリカで出版するとき「人の肌の色が全部同じ。ありえない」と言われ、画家が絵を描き直した。『王女さまのお手紙つき』シリーズ(学研プラス) は、原書の王女さまは肌の色がそれぞれ違うが、日本のは全部白人で、漫画っぽい絵で描かれている。

○翻訳のおもしろさ

翻訳は他者の世界を深く疑似体験できる。『路上のストライカー』(岩波書店) や『シャイローと歩く秋』(あすなる書房)。『ローザ』(光村教育図書) は、ローザ・バークスという人が日本の子どもにあまり知られていないと思ったから、何をポイントにして訳するか考えた。『ホーキング博士のスペース・アドベンチャー』シリーズ(岩崎書店) は、自分でも調べながら訳した。知らなかった世界が開けるのも翻訳のおもしろさ。

○翻訳の難しさ

『クロニクル千古の闇』シリーズ(評論社) は、



今から6000年前のヨーロッパの氏族社会が舞台。出てくる単語がどういうものなのか分からないときは著者に聞く。聞いて初めて分かる。専門用語はそのつど調べる。『カマキリと月』南アフリカの八つのお話(福音館書店) では、

動植物名が南アフリカ英語で、動植物の和名を突き止めるのに1年ぐらいかかった。それからスラング。『リトル・ソルジャー』(ポプラ社) にはイギリスの当時の若者たちが使っていたスラングが出てきた。アメリカ版は会話の部分がアメリカ英語になつているので、それで分かった。そして訛り。『オーブンの中のオウム』(講談社) は、メキシコ系アメリカ人の作家が書いたヤングアダルト文学。スペイン語の人やアメリカの人に聞いても分からなかったので著者に問い合わせた。

○児童書翻訳者の葛藤

翻訳者には、ほかの文化をきちんと伝える役割があると思つている。同時に分かりやすく伝えなければいけない。大人の本なら注をつけるが、小学生が読むものに注がいっぱいあったら煩わしく、子どもは途中で読むのをやめてしまう。日本に馴染みのないものをどう伝えるのか。瀬田貞二さんも石井桃子さんも苦労なさつて訳を決めたのかれたと思つ。

(報告 木村一恵)



講座報告 子どもの本から戦争を考える

日時 7月19日(水) 10時~12時

会場 熊本市立図書館集会所

参加者 9人

課題本 松谷みよ子『二人のイーダ』

講談社(初刊1969年)

担当 堀畑真紀子

夏休み、小学4年生の直樹と2歳の妹ゆう子は母親に連れられて祖父母の家、花浦(広島市に近い場所という設定の架空の街)にやってくる。ゆう子は、何かあれば「イーダ」と口を尖らせるので「イーダちゃん」と呼ばれている。その日の夕方、直樹はお濠端で咳きながら歩いている木彫りの椅子に出会う。翌日、昼寝していたゆう子がいなくなり、直樹は廃屋でその椅子と遊んでいるゆう子を見つける。椅子は「ワタシノイーダガカエツキタ」と喜び、「ワタシハマチツツケテイタ。イナイ、イナイ…ドコニモイナイ。ソウツブヤキナガラ」「ココロハ、グルグルトアルキマワツテイタ。キノウハナガカッタ。ソシテイツノキノウカ、ワタシハカラダガウゴキハジメタ」と直樹に告げる。椅子が発する「キノウ」は時間の停止で「イツノキノウカ…ウゴキハジメタ」はイーダを待つ時間の



長さを表す。これらは「イーダ」がいないことへの不安や喪失感、悲しみを色褪せることなく持ち続けていたことと、「イーダ」への深い愛情とひたむきさを意味する。

部屋の柱には2605年の日めぐりがあった。直樹は、ゆう子の不可解な行動に戸惑いながら、近所に住むりつ子と一緒に、椅子が待ち続ける「イーダ」や廃屋について調べる。病気で仕事に就けないりつ子は自宅療養中で、直樹の話に興味を抱いたのである。後に、椅子は直樹からゆう子が「イーダ」ではない証拠を示され自壊する。後ろ髪を引かれながら東京に戻った直樹の元になりつ子からの手紙が届く。そこには意外な真実が記されていた。

これまで、戦争・原爆を扱った児童書はリアルな視点で描く手法がとられていた。が、本書は「歩く椅子」の象徴性と被爆者りつ子のリアリティ性の融合、更に推理小説的手法も織り交ぜ、新しい手法を提示した。



(報告 堀畑真紀子)

『ふたりのイーダ』について・参加者より

▼初めて読んだ。戦争を分かりやすく想像しやすく表現してある▼心が痛い▼知るために動く直樹の姿が一貫性のある文学にしている



▼時代を超えて生き延びている本▼幼い頃は原爆の火が燃えているような表紙の色も恐ろしくて読めなかった▼りつ子が出自を知ったことが生きる力になったと思った▼この本が書かれたのは戦後30年くらいで、周りにはまだ戦争を語る人たちがいたが、今は少なくなっている。だからこそ子どもたちに読んで欲しい▼推理小説的な部分もあり、冒険もののように読んだ▼中に出てくるわらべうたに親しみを感じた▼静かに語りかけてくるようだった▼映画で見た。映像がきれいで怖くはなかった。日常を奪われることはこんなに悲惨なことだということを描写していた。

〈持ち寄った児童書・絵本、感想〉

『かわいそうなぞう』金の星社、「クレヨンドドーン」『モモちゃんとプー』講談社に収録、『ぞうれっしやがやってきた』岩崎書店、『マシーヤの日記』新日本出版社、『つる サダコの願い』日本図書センター、『青空に飛ぶ』講談社、『不死鳥少年 アンディ・タケシの東京大空襲』毎日新聞出版、『屋根裏部屋の秘密』偕成社、『盆まねき』偕成社、『ダイヤモンドより平和がほしい』汐文社、『とろろながし』偕成社、『ある晴れた夏の朝』偕成社、『爆弾と



將軍』TBSブリタニカ、ほか

▼知ることは大切。フィクション、ノンフィクション問わずそれぞれの年代にあったものを読んで欲しい▼ファンタジーとして戦争を伝えている作品もある▼物語を通して平和な日常はあたり前ではないことを知ってほしい。戦争を知ることとは平和を守ることにつながると改めて思った2時間だった。

(報告 木村一恵)



講座報告 お話の小道具製作と実演

日時 8月6日(日)

10時～12時 小道具製作

13時～15時 実演

会場 熊本市民会館シアーズホーム

夢ホール第1会議室

参加者 9人

○小道具の製作

紙コップでぐるぐる回すたぬきつね

作り方説明 古上 美智代

準備材料 紙コップ2個 色紙 ストロー

① 外側に使用する紙コップに、底を上にして

動物の顔をのぞかせるための窓をカット

→ナイフとハサミでくりぬく。



② くりぬいた窓の上部に色紙で耳を付ける

③ 内側に使用する紙コップ側面に、底を上にしてコブタ、タヌキ、キツネ、ネコの顔を

90度回しながら描く。

④ ③のコップ底中心に穴を開け、先に切り込みを入れたストローを内側から差しこみ

ストロー切り込みを開いてコップ底にセロテープで固定する。

⑤ ③に②をかぶせてストローで紙コップを

回す。

製作の材料や手順は子ども参加を考慮して

簡単にしたつもりだったが、最初はなかなかか

かどらなかつた。紙コップの窓の上下位置や大

きさが様々で、動物の顔が変わって見えたりす

る个性的なくなるくるコップが完成した。基本の

♪こぶたぬきつね♪が完成したら、参加者か

ら新しいアイデアがどんどん出てきた。いろん

な表情のカエルの顔、泣き顔、怒り顔、笑い顔

の人の顔、はたまた歌に合わせて画面が変化す

るくるくるコップなど、午前中の製作活動の後

半になるとアイデアいっぱい

○実演

・童謡「こぶたぬきつね」 歌に合わせてそ



れぞれの動物をぐるぐるまわして窓に出す。動

物を描く順番によっては右回り左回りと個々

の違いがあり歌に合わせて笑いもいっぱいの

実演だった。

・童謡「かえるの合唱」 色々なカエルの顔が

窓から現れ、楽しいカエルの合唱だった。カエ

ルの顔全体が変わるコップ、カエル顔の輪郭窓

から目と口だけが変わるコップ等アイデアあ

ふれる作品で楽しんだ。

・童謡「めだかの学校」 歌詞に合わせた場面

を窓に出す。場面を描くことが難しいが参加者

の色々な助言でたくさんの方々が提案された。

・わらべうた「だるまさん」 ならめっこしま

しよの歌詞を用いてコップの顔に合わせて歌

う。赤ちゃん向けに使いたい。

・絵本『かおかおどんなかお』（柳原良平／作

こぐま社） 絵本の導入として色々な表情の顔

を描き楽しむ。

《参加者より》手作りの小道具は子ども達をひ

きつけてくれる▼変わり絵がとても楽しい▼

画面が変わり表情が変化して小さな窓の中に

見えるのが面白い▼お話し会をやっている保

育園でぜひ実演してみたい▼一つ的小道具製



個々創意工夫で小道具を作り、もつと楽しいおはなし会ができるようにしたい。

小道具製作は個人で取り組む場が持ちにくいので、このように参加者の意見やアイデアを組み入れながら一緒に製作する時間が持てたことは、とても有意義であった。数年前に当講座で取り組んだ変わり絵の「花火」をさらにバージョンアップして、見事な火花を参加者の黒田さんが、最後に実演された。夏の華やかな場面もしつかり楽しむことができた。



(報告 辻 由美)

報告 第5回「子どもと大人の読書会」

日時 9月3日(日) 10時~12時
場所 オンライン会合(ZOOM)
参加者 11人(小学4年生女児3人
▼中学2年生男子3人▼大人5人)
司会 興津 暁子



課題図書は、小学生の部が『びりっかすの神さま』(岡田淳著、偕成社文庫)、中学生の部が『星の王子さま』(サンレテグジュペリ著。2冊とも子どもたちが選んでくれた。

『びりっかすの神さま』は、小学4年生のクラスを漂う「びりっかすさん」を巡り、子ども



たちが考え、成長していく物語。小学生からびりっかすさんを見るために、みんながテストで同じ点数(びり)を取るようになって先生が驚くところが面白かった▼最後のほうで先生が眼鏡をはずしたらびりっかすさんにそっくりだったというところがよく分からなかった。びりっかすさんは、先生のもう一人の自分だったのかな。成績順で席順を決める先生はひどい▼びりっかすさんが「自分のせいでみんながびりになるのは嫌だ、と伝えるところが印象に残った——などの感想が出た。



市田先生がびりっかすさんに似ていたことについては、大人から▼先生の良心の表れ▼疎外感▼競争社会への批判と著者の教師としての葛藤や疲れ——などの感想が出た。転校生のお母さんががんばれという言葉が嫌いというところに共感を覚えた、という感想も。日本人は安易に頑張つてと声を掛けすぎだと。最後に子どもから、自分は運動会でも負けてびりっかすさんがずっと見え続けたほうがいいと思っていたけれど、大人は「本気になったことがなかった」という意見が多かった。違う意見が聞けて面白かったという感想があった。

濯訳で読んだ人が多かった。中学生のうち2人が▼好きな言葉として「ものは心で見える。肝心なことは目では見えない」(池澤夏樹訳)を挙げた。「砂漠がきれいなのは、どこかに井戸を1つ隠しているからだよ」(同)も挙がった▼王子さまが実は花のことが好きだと分かっていく過程がいい▼いろんな星を冒険する王子さまが羨ましい。僕はそれほど大人を変えたいとは思わない——という感想も。小学生から▼王子さまはへびに噛まれて死んだの?▼バラはわがままで自己中心的で寂しがり屋。弱点丸見えなところが好き——などの感想があった。



大人からは▼これまではいろいろ解剖しながら読んでいたが、今回がいちばん素直に読めた▼王子さまはキツネとの対話を通じて、大切なものは世の中で貴重とされるものではなく、自分が時間をかけて関わりを持ったものだということ学ぶ。自分も年齢を重ねて同じ思いだ▼王子さまがぼくに「きみは、なにもかも、ごちやごちやにしているよ。ませこせにしているよ」(内藤訳)と怒りを爆発するところがギクリとした。実際、人生で大事なことはそんなにはない▼一貫して好きなのは、冒頭、王子さまがぼくに全く遠慮なしに「ヒツジの絵を書い

て」と言うシーン。あー、子どもが登場したという感じで好き——などの感想が出た。



有名な言葉「かんじんなことは目に見えない」について、さまざまな受け止め方が出た。

「考え出すと難しい」という第一声が多かったが、▼「砂漠がきれいなのは、どこかに井戸を一つ隠しているからだよ」と同じことを言っている▼親子関係のように長い時間をかけて育まれる信頼関係▼関わるのが愛情のあらわれということを示している▼愛情、誠実さ、大切な人思いやる気持ち▼見ようと思つて見ないと気づかないこと——などの感想が出た。

世代を問わず愛されてきた本だけあって、余韻の残る読書会になった。(報告 横田恵美)
※詳細はHP「会員の広場」をご覧ください。

ボランティア「びわの木」活動報告



7月18日午後、熊本大学教育学部附属特別支援学校小学部のお話会(1~6年生、18名)に木村さんと行ってきた。高学年の子ども達から「お久しぶりでーす」と声があり、待つていてくれたんだ、と嬉しかった。

詩「おれはかまきり」で始めて、科学絵本『およぐ』の読み聞かせ。水泳が苦手な子も興味を

持ってくれたかな。酷暑で水遊びも厳しい今年の夏、せめて河童の気分をと、ペーパークラフトの河童とともに詩「かつぱ」を朗読。子どもたちは暗唱に挑戦してくれた。次は夏の定番絵本『ひまわり』と『すいかをどうぞ』そして『ガ

ンピーさんのふなあそび』で夏の暑い1日を絵本で体験した。そこへ、プーンとあやとりの蚊が出現。「蚊のカノン」の歌に合わせてあやとりの蚊をパチンと潰す仕草。またまたすぐにあやとりの蚊が飛んできて、みんなでパチンと手を叩いて蚊を退治。締めはわらべうた「さよならあんころもち」で大きなおもちゃをパクツ。全学年の子供たちが一緒に手遊びと絵本を30分間、楽しんでくれた。(報告 辻由美)

◇今後の「おはなしボランティア」日程(予定)

- ・ 10月21日(土) 11時~11時半 熊本市立図書館(小学生)
- ・ 10月28日(土) 14時~14時20分 熊本県立図書館(幼児・学童)
- ・ 10月30日(月) 13時~13時半 熊大附属支援学校(中学部)
- ・ 11月2日(木) 11時~11時20分 熊本県立図書館(0歳)

◇報告 第3回研究会活動検討会

日時 8月20日(日) 10時~12時
場所 オンライン会合
参加者 3人



前回(6月11日)以降の活動状況を確認するとともに、ふるさと納税経由の支援の状況を共有した。また、講座「グリム童話の魅力」(8月27日開催)の進行段取りについて確認するとともに、次回開催日の変更(11月26日↓来年2月18日)について相談した。

当研究会を支援先として指定しての熊本県へのふるさと納税額・件数(この半額が24年度以降の研究会活動に活用可能となる)。

23年1~3月	3万6000円	1件
23年4~6月	20万9000円	4件

◇報告 「びわの木文庫」利用状況

6月24日(土)	子ども2人	大人1人
8月2日(水)	子ども4人	大人2人
9月9日(土)	子ども1人	大人1人
・今後の文庫開放予定日		
10月7日(土)、11月18日(土)	ともに13時~17時	

皆様の来訪お待ちしております。



10月、11月の講座・会合の案内



○第4回研究会活動検討会（オンライン）

・日時 10月8日（日） 10時～12時

○講座 子どもの本とは？

①大人の本と比較して

・日時 10月18日（水） 10時～12時

・熊本市立図書館集会所（予定）

○講座 絵本の動物が服を纏うこと

・日時 11月15日（水） 10時～12時

・熊本市立図書館集会所（予定）



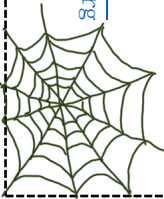
★講座参加には事前申し込みが必要ですが、講座名、参加者のお名前、連絡先を明記の上、メールでお申し込みください。場所、スケジュールについて、お越しになる前に必ずホームページでご確認ください。

メール kouzai@kodomonohon.org



★オンライン会合への参加希望者は左記宛にご連絡願います。

メール zoom@kodomonohon.org



本はともだち！



40周年記念公開講座（9月10日開催）の講師

をさくまゆみこさんをお願いしていることもあり、8月10日に『クロニクル千古の闇』シリーズ（ミシエル・ペイヴァー作、さくまゆみこ訳・評論社）を読み始めましたら、10日ほどの間に、『オオカミ族の少年』『生霊わたり』『魂食らい』『追放されしもの』『復讐の誓い』『決戦のとき』を、全て読んでしまいました。更にさくまさんを熊本にお迎えした9月9日、ネット上で第7巻『魔術師の娘』が8月30日に出版されていることを知り、さくまさんとの会食前に金龍堂まるぶん店で購入して、熊本でもちゃんと販売されていることを報告させていただきました（しつかりサインもいただきました）。記念講演会で、出版されたばかりの第7巻をご紹介いただけ、本当に良かったです。



このシリーズでは、6000年前のヨーロッパ北部の森林地帯を舞台に、オオカミ族の少年トラク、ワタリガラス族の少女レン、オオカミのウルフの2人と1匹が、自らの未来を掴み取るために、様々な試練に立ち向かい、くぐり抜けていきます。この時代の人々は、血族集団

（族）ごとに定期的に定住地を変え、時々交流しながら、森林の中で生活しています。都市どころか町や村もありません。トラク達は、森林、高山、氷河などの中での動植物も含めた自然環境とのコミュニケーションを通して、食料を調達し、寝る場所を確保し、野獣や敵対する部族から身を守りながら、「魂食らい」達との戦いに臨んでいきます。

著者のスカンジナビア半島などでの豊富な実体験に基づく表現が、都市に住む私達にとっては全くの別世界に違和感もなく連れて行ってくれます。その表現を私達の心に届く日本語に映しとってくれているさくまさんには感謝しかありません。

本シリーズの原作は既に9巻まで発行されているとのこと。次作が楽しみです。びわの木文庫にも収蔵してありますので、古代世界への旅のため、お立ち寄り下さい。（横田 真）

■編集 金子・上林・横田 《イラスト》安田 特定非営利活動法人

熊本市子どもの本の研究会 発行

〒861-8029

熊本市東区西原1丁目15の2

ファックス 096(382)5090

